

東京家政学院短大 高野美栄

目的 感性豊かな女子学生が被服造形演習において、ファッション情報をどのように取り入れ、自分らしさを演出しているか、前報同様、ワンピース・ドレスの創作における素材、形態、着装時のコーディネートを通して色彩のもつ意味を明らかにし、イメージ分析をおこなった。又、個人値と形態、色彩の対応から感情要因を究明し、ファッションと色彩効果との関連性を考察して被服制作プランに役立てることを目的とした。

方法 1) 被験者 女子学生66名(年齢18~19歳)、2) 生地購入時期 1994年4月、完成 1995年1月、3) 形態の分類、4) 生地素材の鑑別、5) 表地・裏地の測定 JIS Z 8721 (標準色票) に基づき測定 JIS Z 8102 物体色の色名を用いて検討した

結果 生地素材は時節柄ウール100%で殆んどが梳毛で前報と変化はみられなかった。裏地はキュプラが大半を占め、表地と同系色。スタイルはフィットアンドフレアラインとタイトなスリムラインが主流でドレス丈は膝上。ネックラインもスカラップなどが目立った。色彩傾向と形態の対応では、パステル調の高彩度の青、橙、緑のうす色は「フェミニン」な因子で女らしさを強調したスタイル。黒、紺、の「シック」の因子は大人の雰囲気タイトな体にフィットしたスタイル。「シンプル」の因子のオフホワイト、ベージュ、グレーのうす色はナチュラルラインのセミタイトで変化を求めないスタイル傾向である。前報のようなロマンチックなものはかげをひそめごくわずかであった。以上のことから服装におけるデザインと色彩とは一対のものであり、色彩効果の重要性が確認された。